

発達障がいのお子さんのライフステージを支える ST の役割

社会福祉法人みらい 就労移行支援事業所 ワークステーション未来

赤壁 省吾

小児の ST 領域では医療分野で子どもと関わるケースが多いが現状であるが、ここ最近では障害福祉分野の障害者総合支援法内で行われる児童発達支援サービスや放課後等デイサービスで所属する ST が増えてきていると実感する。医療分野とはまた違ったメリットも多く、家庭や保育所への支援がサービスの中で盛り込まれ暮らしにより近い領域での支援が拡大してきている。集団性のある関わりをベースとして中長期的な視点で関われるため事業所独自の特色あるサービスを展開し、その中で ST の活躍も期待されている。ST の経験年数によってはチームの管理者となり施設運営に携わるなど地域のニーズを踏まえたマネージメント能力が求められる。しかし、児童発達支援分野は関心は高まっているものの ST 間のネットワークが浅いため、この分野で関わる ST としての強いアイデンティティが必要である。

乳幼児期早期の言葉の発達が遅れている場合、他児との関わりやコミュニケーション、学齢期では読み書きや学校生活における適応、思春期において自己理解を行い、青年期においてはこれからの将来像について就労イメージを持ちジョブマッチングし、成人期では就労および余暇活動と暮らしをどう維持していくのか、また親亡きあとにはどのようにしたらいいのか？など様々なライフステージの中で ST としてできることの強みを模索しながら孤軍奮闘しているのではないだろうか？

発達障がいの特性から周囲とうまく馴染めずに自尊心が低下しやすく、また環境によって症状も酷くなりやすいということがある。感覚過敏がさらにひどくなって外出が億劫になってしまったり、より衝動性が高まり感情的になりやすくなり二次障害として身体に症状が出たり、精神疾患のリスクが高まってしまふ。このような当事者の内面で起こっていることが言葉にして伝えられるようになったのはつい最近のことであり、当事者の内面で起こっているコミュニケーションの質的な課題は社会生活の中で大きな障壁となっていることは承知のことだろう。

そのためには、日頃から自己理解を高めるために幼児期には基盤となる自己

肯定感を高め、学童期には自分の特性を知り、思春期には自身の特性との付き合い方を学び、青年期には自分にあった仕事を選択するといった自分を知るための支援が必要である。この講義では、ライフステージについて幼児期～成人期までを取り上げ、一つのポイントである就労に向けての取り組みをお伝えしながら、新しい令和時代に活躍される ST の皆さんへの将来の足がかりになればと考えている。